カンザスでの留学生活

University of Kansas Medical Center
吉川　遼
神戸大学医学部附属病院リハビリテーション科

私は2024年4月より、米国カンザス州カンザスシティにあるUniversity of Kansas Medical Centerに留学しております。

カンザスシティはアメリカのほぼ中央に位置し、周囲を含め有名な観光地は多くなく、日本人の数もそこまで多い地域ではありません。一方で、夏は40℃、冬は－20℃以下になることもあるなど、四季の変化に富んだ街です。

私が住んでいるOverland Parkは、Happiest Cities in America (2025)で5位にランクインするほど、治安がよく、人柄も穏やかで、街並みもきれいで自然も豊かなとても住みやすい街です。

私はDepartment of Physical Medicine & Rehabilitationに所属し、Research Scholarとして主に臨床研究に従事しています。研究指導者であるNeil Segal教授は、下肢の変形性関節症（OA）研究に20年以上携わり、特に膝OAの分野で著名な先生です。主な研究テーマは、「膝OAの早期診断および疾患進行の予測因子」に関するもので、OAにおける生体力学的・構造学的・栄養学的要因が症状や画像所見に与える影響を調べる大規模縦断研究（Multicenter Osteoarthritis Study : MOST)を行っています。さらに、立位CTを用いた3D画像解析により、OA発症リスクを予測できるかを検討する臨床応用研究も進行中です。また、人工膝関節置換術後患者の活動性向上を目的とした多施設ランダム化比較試験（Knee Arthroplasty Activity Trial : KArAT）にも携わっています。



←アメフトのKansas City Chiefsが強くて有名です

留学当初は慣れない環境での生活や研究に戸惑うこともありましたが、研究室のメンバーをはじめとする多くの方々の支えにより、現在は充実した留学生活を送ることができています。当初は既存研究への参加が中心でしたが、ラボ全体の運営や多施設共同研究の仕組みを理解するにつれ、自ら研究計画や解析プランを立案し、主体的に研究に取り組めるようになりました。研究承認取得のための英語書類作成や、高度な統計手法の理解には苦労しましたが、その過程で得た経験と知識は非常に大きな財産となっています。

現在、西はUCSF、東はBoston UniversityやBrigham and Women's Hospitalの研究者・統計家と連携しながら研究を進めており、オンライン会議ツールの有用性をあらためて実感しています。未受理の論文も含まれますが、これまでに筆頭著者として5編の論文を執筆することができました。本留学を通じて、臨床研究における Plan–Do–See の重要性と、統計手法の実践的理解を深めることができたと感じています。

日常生活では、2025年1月に娘が誕生し、家族が増えました。慣れない土地での出産に不安もありましたが、頑張ってくれた妻には感謝しかありません。6才の息子は英語が流暢になり、私の発音の悪さを日々指摘してくれます。現地のbaseball teamやflag football teamにも参加し、本場の練習を楽しんでいる姿が頼もしく、少し羨ましく感じます。また、家族全員で大谷翔平選手の試合やアメフト観戦に出かけ、賑やかで楽しい時間を過ごしています。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった神戸大学整形外科の黒田良祐教授、神戸大学リハビリテーション科の酒井良忠教授、ならびに同門会の先生方、そして本留学に際し多大なるご支援を賜りました上原記念生命科学財団の皆様に心より感謝申し上げます。